随筆

「コロナ禍三話」

安上真胡

コロナ禍で経験した飲食店三店の話をしたいと思う。

２０２０年４月に緊急事態宣言が出され、お気に入りの飲食店も休業になった。こじんまりとしたお店であったが、ご主人の丁寧なお人柄と、見事な盛り付け、お酒の種類も豊富で特別な日に、何度か利用させていただいた。ホームページを見てお店がなくなってしまわないでほしいと願った。小さなカードに一言応援の言葉を書いて、散歩途中にお店のポストに入れた。しばらくたってホームページをのぞくと、私の投函したカードに対してご主人からの暖かいコメントがアップされていた。驚くやら嬉しいやら、そして再開を心から待ち望んだ。これからも美味しいものをいただきたい時や、特別な時に行きたい、大切なお店である。

子どもがアルバイトをしている飲食店のご主人が、コロナになってしまった。気さくな明るいご主人のようで、子どもも楽しく仕事をさせてもらっていた。まかないも美味しく、何よりご主人の大らかで懐の深い対応に、安心して働くことができていた。私もお店に二度行ってみたが、非常に美味しく通いたくなるお店だと思っていた矢先の感染であった。幸いご本人も軽症で、周りのスタッフの感染もなく、何週間かお店を閉じた後再開できたので安心した。どんなに感染対策をしていてもいつどこで感染するのか誰もわからないことだと痛感した。

白レバーが美味しいカウンター６席ほどの駅近くの焼き鳥屋さんに、ずいぶん通った。お通しがちょっと豪華で、焼き鳥も普通より大きくてお気に入りのお店だった。コロナで飲食店に行かなくなって、焼き鳥屋さんはどうしているのだろうと思っていた。遠めに見ていたお店は休業している様子だった。緊急事態宣言が解け、散歩の途中でお店の前を通りかかると、店内を工事していた。作業中の方に「お店はリニューアルするのですか?」と尋ねると「お店が変わるのですよ。」と新しいお店のオーナーが教えてくれた。驚いて前の焼き鳥屋さんはどうさ

れたのかと伺うと「ご主人は亡くなったのですよ。」と告げられ言葉を失った。コロナ過で休業をしているとばかり思っていた。また再開したら通えると思っていた。ご主人のことを想って、悲しくなった。

コロナ禍で飲食店での食事が制限されて、当たり前の生活がどんなに大切であったのかを思い知った1年半。たまにお店に行って美味しいものを食べて、お酒を飲んで、そんな応援しかできないけれど、飲食店が元気でありますように。みんなが元気でありますように。

人生、八十才を迎えて

五十嵐　稚　夫

私は、今年で八十才（傘寿）を迎えました。昭和、平成、令和とありふれた人生ですが元気に八十才を迎へたことは、親兄弟の中では長寿になれるか?父親は七十五才、母親は八十九才で旅立ちました。私は兄弟は男五人で四男です。長男は七十八才、次男は八十二才、三男は六十三才で他界しています。今は弟と二人だけになりました。今まで自分の人生の中では、いつもポジティブに考え、やりたい事をどうしたら出来るか、どうやろうかといつも考えて来たように思います。お金も無いのに何かが欲しいと思えば、いつかは必ずと云ってもよいほど手に入れて来たように思います。まさに物欲の塊かも？　今となっては少し持て余し気味かもしれませんが、今でもその気持ちはあまり変わっていません。食べたり飲んだりする事にはあまり興味がなく、何にお金を使っていたかといえば、まず衣装そしてあらゆるジャンルの模型とカメラです。後で趣味か道楽か分かりませんが、書いてみたいと思います。結婚してからもその辺は、あまり変わらないように思いますが、それは何よりも家内の理解（いや諦らめか?）があった事には、自分勝手にありがたく感謝をしています。時にはなかなか人生は想い通りに行かないもので、悲しみや苦しみなどと寄り添っての人生です。今だから云えますが私の若い時代は、いい加減?なところがあり、結構オープンにアルバイト（デザイン関係）や関連の講師など内容にもよりますが会社の責任者も、許してくれた事がありました。時には

給料よりはるかに多くアルバイト収入がある事もありました。その事が物欲を満たす原動力?になったのかもしれません。八十才を迎えた事で、わがままな私の人生の一部を、断片的ではありますがフォーカスして、差しさわりの無い趣味（道楽）などをメインに書いてみようと思います。次回に…

捨子の夢

井口鐵介

西鶴の『好色一代男』を読んだ。十五歳になった世之介が、美しい後家と逢瀬を重ねているうちに子供が生まれた。始末に困った世之介は闇にまぎれて、ある寺の門前に子供を捨ててきた。西鶴は「夜半に捨子の声するは母に添寝の夢の浮世」という歌を小野小町の作として引用している。しかし、実はこの歌を詠んだのは、室町時代の足利義政の側近、飛鳥井雅親であった。

雅親の歌集『続亜槐集』に、「東山殿より夜ふけて帰りける道に、捨子の侍るが泣きやむを聞きて」という前書があり、

あわれなり夜半に捨子の泣きやむは
親に添い寝の夢や見るらん

とある。

応仁の乱ですべてが荒廃した京都である。暗闇で捨子の泣き声が途絶えたとすれば、奇特な御仁が拾ってくれたか、気まぐれな遊女が抱き上げてあやしたか、不幸にして野犬に襲われたか、などと思うのが普通である。雅親は捨子が暖かな母の胸に寄添う夢を見ていて泣きやんだのだと思った。この子は後にどのような運命をたどったのだろう。

芥川の短編「捨児」を読んだ。時代は下って、明治二十年代の東京である。

日錚という老和尚が、浅草のある寺で住職をしていた。若い頃は深川の左官職人であった。高い足場から落ちて、一時正気を失った後、急に発心して仏門に入ったという伝法肌の畸人であった。

朝のお勤めをしていると、「門前に男の子の捨子です！」と門番が慌てて知らせに来た。和尚は振り向きもせずに「そうか。では拙僧が育てよう」と事もなげに言った。後になってこの頃のことを、和尚

贔屓の門番が樒や線香を売る片手間に、よく参詣人に話したそうである。小さな寺で女手はいない。和尚は看経の合間に牛乳を飲ませ、襁褓を取り替えた。子供が風邪をひいていた時に、折悪しく大切な檀家の法事があった。和尚は法衣の胸に熱の高い子供を抱いたまま、水晶の念珠を片手にかけて、いつもの通り平然と読経を済ませてきたという。

とかくこの世は住みにくい。生きていくのも容易ではない。雅親の豊かな想像力と日錚のような自由な生き方を以てすれば、世の中も随分住みやすくなるだろう。中世の歌人の和歌に対する血の出るような努力や、僧侶の厳しい仏道修行に無縁な私たちは、何を以てこれに代えればよいのだろうか。

和尚に養われた子供がその後どのような人生を歩んだのか。紙面が尽きたので筆を擱かねばならない。興味のある方は『芥川龍之介全集』を紐といてほしい。

『続亜槐集』は国文学研究資料館・デジタル史料に依った。本文は読みやすいように直したが、和歌の原文は左の通りである。

あはれ也よはにすてこのなきやむハ
親にそひねの夢やみるらん

能登半島

市川光治
（文芸光風）

輪島の朝市を妻と二人でぶらぶらした時から、妙な感覚がしたが、それが何なのかはわからなかった。

人通りは少なくあちこちから、ちょいとおにいさん安いから見ていってよ、とやけのような声をかけられ、ついている値札をみればどこも似たものばかりで、それは一軒だけどうでも安い値段をつければ協定やぶりとなるのであろう。ガラスケースに入った輪島塗りとて、いずれの店も一様に馬鹿高い値段であり、二十四の工程を踏むという手間のかけ方からすれば、当然のことであろうが、漆器は美術館で見るに限ると、石川県輪島漆美術館へと出張った。朝市もそうであったが、ここは、なお人影は少なく、いや、はじめは私たちのほかには、誰もおらず、その後五、六人ほどがあとから入ってきたくらいであった。声をかければ館内展示物の説明をしてくれ

るという張り紙を見て、学芸員と思しき若い女性にたずねると、ええよろしいですよ、と愛想よく応じてくれ、軟派に成功したようなほっこりした気分となった。昨日金沢の西の茶屋の観光案内所で、そこにはいろいろな展示物や、茶屋の部屋を復元したものなどがあり、案内員が親切に説明してくれたのだが、東の茶屋では案内されたかと聞かれ、いや東の茶屋にはそういう人はいなかったというと、それは残念なことをした、東にもちゃんと案内員はいたはずであるとすっかり同情され、じゃあれは見たか、と見所のいくつかを聞かれ、生憎見なかったというと、案内を頼めばみられたのに、とまた残念そうな顔をされた。ゆえに、このたびは遠慮はしないことにしたのである。

学芸員の女性はまず例の二十四工程あるという輪島塗の工程説明から入り、展示物を年代順にひとつひとつ説明してくれた。現代になると漆をつかった絵画作品が現れそれは花器などの絵模様には納まらず、額縁にいれて鑑賞するものでありを、細かい象嵌の手法が多いそれらは繊細に美しいのであるが絵画としての評価はまた別のこととなるのだろう。

美術館をでるころには、昼時となっていたが、これから北能登を一周するつもりなので、途中の道の駅で食事をしようと、まずは白米の千枚田に向かったのだがその道の駅は千枚田を見渡す展望台と駐車場のみの簡素なものであった。しかたなく更に北へ向かうと時国家（ときくにけ）の入り口の分かれ道の角にようやく一軒の食堂を見つけた。壁に能登丼の大きなポスターがありほっとして中に入ろうとしたが、戸が開かない。道の反対側の奥のほうに自動車の修理屋があったのでそこへ行って、「食堂は休みなのですか」と訊いたのだが、逆に「休みなのかい」と言われる始末であった。

つまるところ、コンビニがポツンとあるのをやっと発見し、サンドイッチとお茶で昼食を済ましたのであった。

私の米寿

梅澤輝也

「年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからず」わが家の庭も毎年違うこと無く、白梅、福寿草に始まり：嵯峨菊、山茶花と花を咲かせる。一方、幾人かの友とは幽明界を異にする。私はこの世に生を受けて八十八年余り、世間で米寿といわれる節目を過ぎた。新型コロナの世界的蔓延で、三密を避ける行動が求められ、私の予定も大分変わってしまった。

一つは、ドバイで勤務する息子を訪ね、今回はアブダビでイスラム文化に触れてみたいと、エミレイツに予約をしていたが、計画は頓挫して今のところ保留のままになっている。

東京オリンピックは、準備段階から波乱含みで新国立競技場の当初案は多額の建設費のため白紙撤回で見直され、大会エンブレムも盗作疑惑で再検討、関係者の贈賄や問題発言も次々と起こった。開催は新型コロナで一年延期となり、競技は無観客で実施された。私はボランティアの事前研修も受けて備えてきたが、真夏の競技日程や海外からの観客は無く、己の年齢も考慮して、参加を辞退した。

また、この機会に友と集ってポットラック・パーティも秘かに描いていた。その席でお気に入りの赤いアロハシャツでウクレレを暗譜で十曲弾いてみたい、と。これも今の状況では、残念乍ら画餅に留まっている。そうこうしている内に、私自身の体力や知力の衰えが懸念されそうだが、もう暫く夢を見させて貰うことにしよう。

行動に制約がある中だが、この通過点で何かしら記しておきたいという思いは強い。そこで会社を退いてから二十三年、折にふれ書きとめた小文を、もう一度見直して纏めてみることにした。顧みれば、世の移ろいは激しく、また人との出会いも別れも重ねてきている。取り纏めたものは、言わば私の第二の人生での出来事で、時の移ろいを経糸に、緯糸は歳歳年年、偶然と必然を重ねながら、人とのふれあいを書きとめたものである。

この企画に江ノ電沿線新聞の社長が応じて呉れた。私の考えは、中身の伴わない豪華なものにはしない。カラー写真を入れると見栄えは良くなるが、

一〇〇部作製の試算でセコ・ハンの車なら買えそうな金額となるので断念する。どう気張ってみても自己満足としか言えない駄文の代物、果たしてどれほどの人が読んでくれるかと思い、迷う。配布する先の年齢層を考えると、細かな文字では読んで呉れそうにない。そんな思案の中で編集が進められた。校正の度に文字が装い整われ、表紙も姿を見せてきた。

私の米寿記念の小冊子「経糸・緯糸」、その完成を今、なんとなく落ち着かぬ気持ちで待っている。

ちっちゃい絆　大きく育て

笠　原　正　義

私には、姉妹の孫がいます。女の子のきょうだい、あねといもうと、と云う間柄です。まだ、おねいちゃんは幼稚園の年中さん、妹は未就学で、来年入園です。そんな、二人の日常風景から、絆について、感心させられる場面を拾ってみました。

まだ、妹が小さい頃。そう、赤ちゃんの頃です。おねいちゃんが、「もう赤ちゃんなんていらない」と言ったことがあります。強烈に印象に残った言葉でした。ママが、赤ちゃんの面倒ばかりみて、私と遊んでくれないという事なんでしょう。

そして、今は、その赤ちゃんも大きくなり、あねといもうとの関係ができています。おねいちゃんは、バス通園で、毎日、朝と昼に送り迎え。自宅からバス停まで、いつもふたりで手をつなぎ、行き来しています。手を握り合うことも絆でしょう。おねいちゃんは、妹をかばい、いもうとはおねいちゃんを信頼して、一緒に歩く姿は、微笑ましいシーンです。まだ体は小さくても、もう、ちっちゃな絆が芽生えているのだと、気付かされました。

おねいちゃんが、幼稚園に行っている間、妹は一人ぼっちです。手持ちぶたさをしています。おねいちゃんが帰ってくると、妹のテンションが違います。一緒に仲良く、時には喧嘩をしながら遊びます。

ごはんを食べる、遊ぶ、お風呂に入る、寝る、何をやる時ときも、いつも一緒、「きょうだいっていいなぁー」と感じます。そして、その時、おねいちゃんは、妹を気遣い、妹は、おねいちゃんを信頼し、ふとした場面から感じ取れるちっちゃな絆が沢山あ

ります。まだ、ちっちゃな姉妹ですが、もう大切な絆も芽生えているのだと、気付かされます。

今、私も親が亡くなって兄弟だけとなって、その大切さが感じられます。孫たちも、体が成長していくと一緒に、心も成長し、やがて大きな絆となるでしょう。

最後に、絆とは、目に見えないから、切れるものではないだろうから、きっと、絆は生まれるものだろうから。あるいは、深めるものかもしれない。愛情があり、愛着が生まれ、信頼が深くなり、絆となる。同じ時間、同じ想い、運命共同体のような切れない関係、間柄のことなのかもしれないです。

うつくしい五月に

香霜　小太郎

緑のあざやかなうつくしい五月になった。若いころに覚えた二つのうたがある。ひとつは Im（イム） wunderschönen（ヴンダーシェーネン） Monat（モナート） Mai（マイ）（うつくしい五月に）で、樹々の芽生えと恋の芽生えをうたったハイネの詩だ。しかし中身はすっかり忘れて今ではこのタイトルしか覚えていない。もうひとつは小学生のころに習った「若葉」で、（あざやかな緑よ『途中は忘れた』薫る薫る若葉が薫る）という一節だ。散歩しながらこの二つを呪文のように唱えると気分がいちだんとたかまるのだ。

素敵な樹々の若葉を眺めながら散歩していた或る日の事だった。

途中の小さな公園でひと休みしていた時、若いお父さんと三才くらいの女の子がすべり台にやってきた。女の子はすべり台の上まではあがれるのだがどうしてもすべることができない。いったん降りてきてまたあがってゆくことを何回もくり返し、しばらくの間すべり台の上に立っている。お父さんは「支えてあげるから大丈夫だよ」と行動を促す。ついに女の子は真剣な表情で決心し目をつぶって実行する。「ああ、私はすべれたんだ！」。その瞬間の彼女の表情の光かがやいた誇らしさと可愛さにぼくはベンチからみとれていた。「よかったね！」。そしてたぶん二十二世紀まで生きるだろう彼女にひそかな祝福を送ったのだった。

ベンチを立ちあがって再び散歩をはじめ、いつものとおりモノレール駅で新聞を買い、階段を上り道路に出て数歩あるき出した時のことだった。二十才前と思われる少女が白い杖を持ち重そうな荷物を抱えて、手すりにつかまりながらゆっくり階段を下りはじめたのだ。その少女の顔とふんい気がまたなんとも清純で凛としていて、ぼくは思わずその姿を見守った。荷物を持ってあげようと一歩踏み出したのだが、こちらはただでさえ階段を下りるのに足許の覚束ない年寄りで一瞬ちゅうちょした。その時幸いにも中年の女性が通りかかり少女の荷物を階段の向うまで持ってあげたのだった。ぼくはほっとして二人の姿を見送りまた散歩をはじめた。あの清純で凛とした少女はこれからも長い人生を送ることになるわけだが、どうか幸せになってほしい。

三才の女の子と二十才前の盲目の少女のこれからの人生に想いを馳せながら、ぼくは気持がさらに明るくなり散歩を続けた。

二つの平凡な日常のささやかな出来事に感動したことと、それ以上に、この老残の身にも人を想い人に感動する感性がまだ残っていたことがうれしかった。

文学不在の時代

加藤寿子

「文学不在の時代でございます」、つまり、「文学の主題は苦悩であります。しかし、現代になり、貧困病苦などのやるせない苦しみがなくなってまいりました。」文芸評論家の江藤淳氏が鵠沼公民館に講演に見えると広報で知り、長女を連れて聞きに行ってからもう三十年余り過ぎた。沈吟の言葉のようで、胸が痛んだ。

「有名な先生が快諾して下さり、大変感謝しております」と紹介され、きりっとした外見だが温厚な印象だったことを思い出す。今は苦悩の少ない幸わせな時代を満喫しているのだ。安くてもカロリーの高い食品が手軽に買えたり、良く効く薬が開発され、病気の苦痛も軽減されてきた。不治の病の宣告をされたとしても、昔の人ほど苦悩しないようになったのだろう。

書くことにより、苦痛を紛らわす必要がなくなっているのか。人は書くことにより、他人に向かって話しを聞いてもらうことと同じ位の効果を得ることができるそうだ。私はその頃小学校六年生の長女の子育てに悩んでいた。「親の不快な人間関係が子どもに影響して子どもが悩んでいますね。」担任の先生に指摘されたが、解決方法が分らなかった。担任の先生が家庭訪問に見えたとき、夫が聞かずに外へ出てしまったことがあった。「お父さんが可愛がっていないから、人間不信になっているのですよ。」とも言われた。「怖い」とか、「相性が悪い」とも言われ、悩みの暗い淵に沈んで、気分を変えることが不可能になっていた。

その気分を私は毎晩のように、神奈川新聞の投書欄へと書き送った。知人に書き送った時、「ご迷惑ですか?」と聞いたら、「迷惑です」と答えられていた。しかし、新聞社の包容力は大きくどんなに嫌味な文を送っても、何の文句も返してこない。夜更けに、近所のポストに投函した。このことにより、私がどれ程救われたことか分らない。

その後江藤淳氏が、「妻と私」という本を出されたので、私も図書館で借りて読んだ。朗らかだった奥様がご病気で亡くなるまでを冷静に、しかも愛情深く丁寧につづられていた。ほどなくして氏が自死されたと知り、大変衝撃を受けた。苦悩された結末なのか。「文学は今や過去の遺物になり始め、その証拠にもはやすぐれた作家は出てこないものと思われます」江藤氏は語られた。

ＳＮＳで気軽に自分の気持ちを上手に表現し、画像で的確に発信することができる。今になると、「文学不在の時代」は幸福の多い時代という意味であり、祝福の言葉であったように思える。やるせない思いで暮らすより、楽しく過ごすのが理想であると思う。しかし簡単な憂さ晴らしを求めず、苦悩の中で必死に生きる尊さが人間の美しさだと私は思い、失ってはならないものだと思っている。

天津から引揚げて

加藤秀子

初めて終戦を知ったのは玉音放送だった。小学校四年生の私には意味不明のまゝその日の午後、いつもの様に遊び場にたっていた。町はシーンと静まり死の町の風景だった。父が威厳のある顔で私に近付き「日本が負けたのだから外出は危いからこれからは外出しない様に」と云われ共に帰宅した。いつ帰れるかわからない毎日が続いた。噂では、出征軍人の家に強盗が入った。ソ連軍の参戦で、満州に居る女性は男装でなければ危険らしい、日本は空襲で全滅に近いらしいとの事だった。隣組を一グループとして、二月に引揚げる事になり、旧日本軍利用地の跡に集結する事になった。トラックに立錐の余地もなく詰込まれて赤ちゃんが泣続けて居たが、身動きできずに目的地に着くと、赤ちゃんは冷くなって居た。いつ引揚げ船に乗れるかわからないまゝ乗船する日を待って居た。一ヶ月程だと思うが、突然夜遅く出発する事になった。途中で中国人に襲われない様にとの配慮からだった。隣組の中に、五才を頭に二才の二子と一年未満の乳飲子を連れた夫婦が居た。荷物はおむつで一杯だった。母に男の子一人を集結所に置いて行こうかとの相談があった。兎に角連れて行ける所迄連れて行こうとゆう事になった。夜遅く月光の中、自分の背丈以上の布団を背負った父を先頭に家族は歩きだした。疲れて睡魔に襲われそうになった時、休憩の合図があった。七十歳の祖母は、座ると動けなくなって居た。「私は充分して貰ったから此所に置いて行って欲しい」と母に云った。母は「義母を残して私は帰れない、親戚に合せる顔がないどうしても一緒に帰って欲しい」と涙ながらに訴えた。子共四人と、おむつを抱えた夫婦は此所で又、子供一人を置いてゆこうかと相談して居た。急きょ母の荷の一部を捨て、二子の一人を背負う事になった。又十五の姉の荷物の一部を捨て軽い七十歳の祖母を背負う事になった。明方天津港に着いた。ようやく上陸用船艇の船底にギッシリと詰めこまれ船は動きだした。日数は記憶にないが、玄界灘では船底が大きくゆれ、人のかたまりも大きくゆ

れた。或る日、突然「日本が見えたぞ」と口々に叫ぶ声が甲板から聞えた。私も甲板に出て見たものは、箱庭の様に緑に囲まれた生れて始めて見る小さな祖国だった。無事に日本に着いた事を涙を流して喜ぶ大人達が居て、その港の名前は佐世保だった。佐世保の収容所の食事は消化不良になる様な食事だった。翌日父が一人で母方の姉の様子を見に行く事になった。幸い焼残って居た。翌日貸車の切符を手に、家族で伯母の家に向った。鹿児島駅の朝のホームから見た市内は見渡す限りの焼野原で蔵がポツンポツンと建っていた。茫然と立ちつくす私は、戦争の凄まじさを初めて目のあたりにした。伯母の家族達と会った翌日から戦後の食糧難の流れに流される日々となった。

こころにうつりゆくよしなしごと

川戸幸江

新型コロナという感染症が猛威をふるう今、おしゃべりもままならぬ日常、つれづれなるままにTVを点けると〈長谷川式簡易評価スケール〉の番組が目にとまった。

さまよえるDr長谷川の心はこう叫ぶ。妻の弾くピアノ『悲愴』を聴きながら・・・

「Where are you? Where, am I?」と。また「奪われたものは〝確かさ〟だが、心配はあっても気づきがないからね、神様が用意してくれた救いだね」とも。

このスケールは、一九七四年にDr長谷川に拠り示された認知症の診断指標である。見当識、計算力、注意力、記銘力等、十一項目の設問の下、採点されるもので〈目に見えない領域にものさしを示した〉ものである。外来だけでは不充分と考えた彼は、デイケア丈ではない現在のデイサービスの形に近いものを提唱、人々の心に篤く寄り添う彼はこの創設に着手した。彼には忘れられない患者がいた。その若き音楽家は、若年性アルツハイマー型認知症だった。「僕にはメロディがない、和音がない、共鳴しない、返ってきてよ僕の心よ、想いの源よ。」と詠う若者に彼はボロボロと涙をこぼし、この研究は何が何で

もやり遂げようと決心する。二千年には介護保険制度もスタート、このスケールは大きな道標となったのである。

そのご、彼自身が逍遥の魂となるが、患者にレッテルを貼られることのないよう、二〇一七年、自ら嗜銀顆粒性認知症であることを公表、奇しくも先輩教授から授ったことばは「君自身が認知症になって初めて君の研究は完成する。」というものだった。つまり、遂に認知症になることができたのである。

「先生、今の"景色"はどうですか?」と問う記者に、「うーむそうだな、何にも変らないよ。なのに家人はデイサービスに行くように言うんだ。」そして研究の第一人者だった彼はこう言ったのだ。「デイに行きたくないな!」と。

このパンデミックの中、(大切なことは)患者の心の縒り糸を、"何気ないふだんの会話"が支えているということを痛感している。二〇二五年には五人にひとりが、Dr長谷川を追いかける。

(NHK:NスペPlus参考)

裸の大将『山下清画伯』への想い

小池　貴瓊子

今、テレビ神奈川で往年の「日本のゴッホ」といわれた放浪の天才画家の「山下清」原作の「裸の大将放浪記」の懐ドラが放送されて、私には　楽しみの一つである。というのも当時健在だった父母と必ずこの主演「芦屋雁之助」扮する山下清を描いたドラマ。そしてその主題歌を唄う「ダ・カーポ」が大好きだった事。そして懐かしい今は亡き父母と共に楽しくテレビにしがみついてた若いあの日が思い出されるから――。亡き父は「山下清」をとっても尊敬して好きで　真似して真夏は裸の大将だった。

「野に咲く花のように風に吹かれて、野に咲く花のように人を爽やかにして…。」とダ・カーポが唄ったのは故小林亜星の作曲でこの歌はとってもきれいな心を癒やされる歌である。

「芦屋雁之助」のハマリ役で見事に「山下清」に扮した演技は素晴らしい名優といえる。亡き父は「山

下清」の描いた素晴らしい切り絵の本物が　見たくてわざ〳〵母や私を誘って当時の横浜の「野沢屋デパート」へ行って展示された絵を感動して観て、私も原作の本を買い込んだ覚えある。文章の助詞に「ので〳〵」を使うのが彼の文体の癖であった。心が美しく純粋で無欲で正直で自由奔放の真人間で、本人は知恵が足りない頭が悪いと口癖に言ってたが、本当は天才と言える画才のある人だった。でも千葉の八幡学園「式場隆三郎博士」の施設に入ってたというので、知的障害はあったらしい。彼の死はあまりに早く、本に依ると母親がまだ健在で「清、ごはんよ。」と二階へ起しに行ったら既に彼は息絶えてたそうでまだ50代の若さだったと思う。早すぎる死といえ、神様は決して彼を苦しめず、人知れず楽にとお迎えに来られた。母親があり乍ら誰にも看取られず旅立った事は、勿体ない命といえ彼にとり苦しまず、この世を去れた事は、諦めようで幸せとも言えよう。この世の中で「山下清」程心の美しく純粋な男性はないとよく亡き父は一トかけらの色気（性欲）のない男はこの世の中で「山下清」丈と彼がおよそ女性に対して、変な恋心を抱くような男でないと主張した。でも彼も一人の男性やはり彼に夢中に恋をした女の子もあったというが、彼の方には絶対女の子に惚れるとかそういう汚れた心でなく、あくまで純粋にドラマの中でその少女の愛に応えている。人間皆一人〳〵恋をしないで一生を終る人は先ずない。生命あるもの全て皆異性への憧れや恋する心はあって当然でその心がなければその人は不具者ということになる。よく「男は嫌い女は嫌い」と昔言う人に出会ったけど、口先丈で、一生の内一度はいいなあと憧れを抱く人に両思いでなくても会って胸をときめかせた人もあると思う。その心が人として当り前なのだから…。私は自分が野に咲く薊の花のように棘のある女だったから、誰にも触れられないまま年を取って了った気がする、だから野に咲く花が大好き。華やかでなくても道端にひっそり誰の目にもとまらず、さみしそうに、ひそと咲く可愛い目立たない花に心より愛着を感じてうれしくなる。暖かい春の日を浴びて、小川沿いに可憐な小さな野花を見つけると、喜びの心が湧いて嬉しくなるひそと咲く野の花に真の美があると思う。
野の花の如くけなげに短い一生を精一杯かけぬけた

「山下清画伯」私はあなたのような人を　一生涯忘れずこれからも生きてゆきたい。

イタリア民謡

近藤　拓

先日何気なく高浜虚子の「五句集」を捲(く)っていたら、こんな句に出会った。

伊太利(イタリア)の太陽の唄日向ぼこ

この句は、昭和十二年（１９３７）一月十一日鎌倉駅で電車待の間に出来たと書いてある。

虚子は、前年にヨーロッパ旅行をしているので、ベンチに座って、冬にしては強い日射しでも浴びて、イタリアを思い浮かべたのだろう。筆者は、”太陽の唄“は「オ・ソレ・ミオ」だろうと思った。この歌が日本で何時から歌われたか知らないが、大正元年（１９１２）生れの亡き母が、「女学校時代に習ったわよ」と言っていたので少なくとも昭和初期には、かなりの人が知っていたのであろう。

イタリア民謡は、小学校の頃が聞き初めで「サンタ・ルチア」「オ・ソレ・ミオ」「フニクリ・フニクラ」「村の娘」である。中学校では「サンタ・ルチア」「オ・ソレ・ミオ」を習った。高校では「帰れソレントへ」「海に来よ」だった。大学生の頃は「カタリー」が大流行で、うたごえ喫茶では「山の大尉」「しゃれこうべの歌」などを歌った。社会人ほやほやの当時、北イタリアのサンレモ音楽祭で優勝した「ヴォラーレ」「チャオ・チャオ・バンビーナ」など、新しい一群の歌がカンツォーネと呼ばれ押し寄せて来た。

イタリアへ旅した時に、ツアーコンダクターや現地のガイドさんは、ライブハウスやレストランで、イタリア民謡をリクエストするのは、日本人とアメリカ人で、アメリカ人は古くは大歌手カルーソ・映画のマリオ・ランツァ、ポピュラーの大御所ペリー・コモ、日本人はタリアヴィアーニやステファーノの影響が大で、さらにパヴァロッティ、ドミンゴ、カレーラスの、いわゆる三大テノールが追い討ちを駆けているのだろうとの御託宣だった。

さて、虚子の句に触発されてイタリア民謡との関

わりを綴って来たのは、好きだからである。メロディが明るくて美しいからである。歌手の声がきれいだからである。それと映画が好きだからでもあろう。イタリア映画「ロベレ将軍」や「越境者」のラストシーンや「ナポリの饗宴」の全編これナポリ民謡。アメリカ映画だが「旅愁」に流れたカルーソの歌声、伊・独合作の「忘れな草」などの影響も大きかったと思う。

かって美声を誇った?筆者も長年の喫煙のせいで、声はガラガラし音域も狭まってしまった。その恨みか、最近の歌は全部とは言わないが、どんちゃかどんちゃかリズムが主体で、おまけに歌手が悪声なのが気にいらない。

何枚も持っているのに、今でもCD店や駅の通路の出店(でみせ)で、イタリア民謡の獲物あさりをしている。

「日本の八月に思う」

榊　原　百合子

七十六年前、広島と長崎に、人類史上初めての核兵器が使われた。しかし、今だに、この地球を滅ぼす大量の核兵器は、なくならない。米国、ロシア、中国、北朝鮮と、核軍縮は、先細りである。そんな中、令和三年の今年一月、核保有国や、日本など米国の「核の傘の下にある日本は参加していないが、人類が核兵器を違法とし否定する」、核兵器禁止条約が発効をした。思い出されるのは、一九八一年二月、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世が来日した。東京と広島とでカトリックのゴミサをあげた。

東京も広島も、雪がちらついた寒い日だった。私は両親、姉と共に、東京ドームのゴミサにあずかった。片言での平和への祈りは生涯忘れない。広島では原爆ドームを背に、「私の思いは平和の思いであって、苦痛の思いではない」、と神は言われると、ラテン語の一九八一年二月二五日のメッセージがあった。

カトリック教徒二万五千人を前に、原爆でなくなった人達の慰霊碑に花をたむけられた。地面にひざまついた姿、四〇秒か五〇秒間であろうか？目をとじて、祈りささげる姿は、テレビの画面からではあるが、涙が流れた。

そして、ゆっくりと、日本語でかたられた。「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です」と。

「広島を考える事は、核戦争を拒否することであり、平和に対しての責任を取る事です」と。この平和のメッセージは、九ヵ国語でかたられた。

今年、七十六年目の夏をむかえるが、我が国は、オリンピック一色だ。

しかし、歴史を忘れてはならない。米国女優マリリンモンローは、新婚旅行先に広島を訪れて、平和記念資料館で、ため息の連続だったと聞く。ジョンレノンの妻、オノヨーコは「イマジン、ピース」「平和を想像しよう」と訴えた。このオリンピックの二〇二〇年大会の折、平和だからこそ、東京大会だって出来るのだ。その七十六年前の核の悲劇を忘れてはいけない。今年、やっと黒い雨の裁判に、国は決着をつけ、すべての人に被爆者手帳を発行するとした。

世界の核実験場　核施設が、世界には多くあり、被害がでている核施設もある。

日本は、世界でただ一国、広島、長崎の二ヶ所に原爆を落された。そして、静岡県焼津の福竜丸の漁師達は米国の水爆実験にあっている。「ノーモア、ヒバクシャ」ヒバクシャと国連で明記されてもいる。決して、日本の二の舞はさせてはいけません。日本国は世界に、声を大にして「核は、悪魔」核は、人道的な観点からみても、非道であると、皆でコールしよう。テレビはオリンピック一色の中、私は決して、八月の日本に、敗戦、被爆、決して忘れてほしくないと祈りを捧げた。

松本重太郎のこと

佐藤壽一

近頃、渋沢栄一がいろいろと話題になっている。明治時代の経済界で、その渋沢栄一に対し、「西の渋沢栄一」と言われた人がいたと、城山三郎さんが、「気張る男」という本に書かれている。（文藝春秋社刊）

それは、松本重太郎という人で、銀行、鉄道、紡績、ビール会社などを次々と創業し、「関西実業界の帝王」と言われたという。

その松本重太郎は、京都府の北方、丹後半島の三方を山に囲まれ、日本海に面した間人（タイザ）という小さな町に生まれた。

十才の時に家出して、京都まで四日かけて歩き、何とか呉服商で丁稚に雇われた。

その後、大阪に移って奉公し、番頭の許しを得て、塾に通って勉強をした。二十才になって一応独立し、店はないが、堺に行って反物を仕入れ、大阪に戻って買手を探し回って売りつけるという仲介業を始めた。その内、大阪の船場に、間口二間半の小店が売りに出たのを、援助してくれる人がいて入手した。明治三年、まだ三十に間のある若さだった。

そして、扱い品を洋反物を中心とした舶来品に代え、売上を伸した。断髪令が出て、ちょんまげが許されなくなると、頭が淋しくなるし、寒さを感じるから、帽子や襟巻の類が売れるのではないかと考えた。然し、神戸では舶来品を大量に仕入れることが出来ないので、長崎まで出掛けて仕入れて売り捌き、まとまった金を手に入れた。

そんな時に、後援者の紹介で、武家の娘、浜と結婚した。それからも、いろいろ商才を発揮していった。東京で、士族達の資金運用の為に渋沢栄一が第一国立銀行を創立したのにならい、明治十一年、銀行を設立した。そして、有能な若手の役員を得て、お客の都合最優先、人物本位を旗印に規模を拡大していった。

更に、東で新式の紡績工場がつくられたことを刺戟として、大阪でも近代的な紡績会社をつくろうという機運が生まれ、重太郎が中心となって、明治十

五年、大阪紡績が設立された。また、横浜、新橋間に鉄道が開通したというので、これも重太郎が中心となって、大阪府知事に申請して、大阪堺間に鉄道を建設した。この後、山陽鉄道の発起人となり、大阪から姫路までの鉄道を開業した。

堺の酒造家鳥居駒吉が、ビール進出を企てたのに同調し、大阪麦酒を設立した。

毎日新聞が、明治二十三年、株式会社に改組するに際し、大阪財界を代表する形で監査役に就任した。

このように関西財界で活躍した松本重太郎は、満更、私と関係がない訳ではないのだ。

彼に三人いた妹の一人「まつ」が、私の父の祖母だった。

ただ、父は、どういう訳か、松本重太郎の名を言うことはなかった。

この街に住む

自　然

（文芸光風）

人と人が不思議な縁で結ばれているように、住むところとの縁もまた不思議である。四国生まれの私が、全国を転々として、いまここ藤沢大庭に住んでいるのはまさに奇跡である。

いかにしてこの地に住むようになったか、この町との古い関わりの記憶を辿ってみる。

もう七十年近くも前になるが、高校の修学旅行で江ノ島に立ち寄り、赤いガラスの文鎮を買った。一枚の写真が残っている。

東京の大学に進んでからも何度か訪れたが、目的は江ノ島で、その頃は江ノ島が藤沢市であることさえ知らなかった。

社会人になってから、名古屋にいた頃の上司が、自宅は藤沢で海の近くにある、と聞き、どんなところかと想像した。

学生時代にお世話になった下宿のおばさんが「東京を引き払って鵠沼海岸に来たの」というので何度か訪ねた。瀬戸内の町に育った私には懐かしい海の匂いがした。住まないかと誘われたが、通勤するには遠すぎると感じてアクションを起こさなかった。

定年を迎えるころになって、その後の住まいを探したが、最後の候補地が藤沢であった。

初めて来た時、辻堂駅北口には大きな工場があり、葬儀社とパチンコ屋があるだけだった。だからそれほど期待していなかったのだが、トンネルを抜けると、その先に整然とした街並みが広がっているのに驚いた。

街並みのほかに城址公園や田園まである。薬屋の店先で猫が昼寝をしているのを見て「ここだ」と決めた。

住んでみると、遠いと思っていた通勤もさほどではなく、気候は温暖で、辻堂駅からのバス便も多く、買い物にも便利、市民センター、おまけに図書館もある。適当に田舎で、適当に文化的なところが気に入った。若い時には全く考えもしなかったが、この地を終の棲家とする気になったのだ。そうやって見ると、過去の藤沢との不思議な縁に思いが至るのである。

三十年もの間に、藤沢市周辺の環境もずいぶん変わった。辻堂駅前はショッピングセンターを中心に市街は大変身し、近くには大学や総合病院。引地川には親水公園が整備され、桜並木は市内でも有数の名所となった。おかげで渋滞も発生するようにはなったが…。

わが国の人口減少が進むなか、藤沢市も今後の大発展は無理かもしれない。望むならば、いまの規模を維持し、地域中核都市としてキラッと光る個性を持ち、住む人にやさしく、姿やかに変化して行く都市であってほしい。

私もこの街に根をおろし、八十歳を超える年齢ともなったが、それでもなお毎朝五時、引地川親水公園に歩きに出かけている。穏やかな流れ、花や鳥や虫たち、稲の育ちに季節を肌で感じ、富士山を遠望し、仲間とのお喋りを楽しむ。人生の残された時間を、ゆっくりと味わいたいものである。

街をきれいにしようよ

篠原貴子
（はまゆう）

二年位前になるだろうか。犬の散歩道にゴミが散らかっているのが目についた。散歩は団地1号棟から13号棟まで廻って帰って来る終点の公園で、ひと休み修理された東屋には腰を下すところがある。夕方は親子連れでにぎわう。ここにも目につくゴミがある。一服して帰るのだろうか。「たばこ」の吸いがらがいたるところで落ちている。

次の日ビニール袋をもって出かけた。何と袋一杯のごみ、空缶やペットボトル、プラスチックに入った弁当のからなど、自分でもびっくりした。その先にあるコンビニでパンや飲物を食べながら歩いている若い人もいる。拾った「たばこ」の吸いがら123本、翌日も98本、公園の東屋の廻りには35本もあった。私は落ちていた木の棒で、土や砂の上に「たばこなげすて禁止」、「たばこの吸いがらダメ」と毎日〳〵書き続けた。吸いがら入れの缶も取り付けてみた。

一ヶ月位たった頃、たばこの吸いがらは少くなり、一年が過ぎた時はほとんどなくなっていたが、目に見えない垣根の奥にはペットボトルや紙コップが枝の中にささってあり、最近ではマスクが目立つ。

しかしその後、又ごみが目立ち始めた。誰れが捨てるのか見たことはない。そうだ毎日の犬の散歩は、私の健康にも役立っている。どうせ歩くなら地域をきれいにするのも一役かな?と思った。息子が買ってくれたシルバーカーにビニール袋のせて出発。そこで私は短冊30枚ほど作り、針金で団地内と外目立つところにつるした。短冊には「私達の手で街をきれいにしよう」「私とあなたで街をきれいに」「ごみのないきれいな街ねと言われたい」近所のSさんの御主人が筆で文字を書いてくれた。私が犬と一緒にごみを拾っているのを見て声を掛けてくれる人もいる。

ラジオ体操の友達、犬友、朝夕散歩しているおばあちゃん。「まあご苦労さまね、団地にお住いじゃないのに」「5階から見ていたら誰かと思ったら篠原さん」など声をかけてくれる人もいる。老人会の

役員Iさんが、「ボランティア」と赤書字のビニール袋を何枚も差入れてくれたり、「分別は私達ゲートボールの仲間でやるから」と助人も出て来た。

私とSさんの御主人は毎月一回「5（ご）＋3（み）」八日にゴミ拾いをすることになった。ちなみに町をきれいにする委員会を二人で立ち上げ会長はSさんの御主人、私が副会長におさまった。82歳と85歳のボランティアの誕生である。短冊をつけてから二ヶ月、ゴミが少くなった様な気がする。何ごとも続けることがかんじんと二人で張り切っている。ある時短冊二枚、いたずらされているのがあったと会長、「気にしない気にしない街をきれいに心もきれいにしていこう」五月は環境週間「今日も張り切っていこうね」……我が家の愛犬「ラ〜」君と一緒に。

コロナウイルス前と後に思うこと

澁谷恵子

早いもので、マスクを手放せない毎日になって、一年半を過ぎました。

その間に、世の中も少しずつ変わって来た気がします。初めは、こんなに長くなるとは思わず、家で出来る事をすれば良いと言う気持ちでいました。

以前よりやってみたかった薬膳の勉強をしたり、それで免状をいただけたりとコロナウイルスに気を付けながらも出来る事をしようと思っておりましたが、一年過ぎても、終束にならないと気が付いた時からは、自粛ばかりの守りだけでは、困ったと思う様になりました。

続けていた漢方薬の勉強は東京等の会場に行くのは心配で、オンラインやオンデマンドに頼ることになりました。そうこうする内、すべて、会場に行かなくても受けたり、どちらかを選択出来る様になりました。

往復三時間以上や場所によっては、宿泊しないと聞けなかった講座が聞けたりと何と便利だろうかと思いました。

趣味についても、自粛期間中に、始めた赤絵細描や、フラワーアレンジメントのオンラインレッスン等、在宅期間が長かったお陰で取り組めた事がありました。

赤絵細描とは、九谷焼赤絵細描です。ポーセリンペインティングと言う白磁の陶器に、釉薬で絵を描くことは、もう二十年近く続けていましたが、九谷赤絵の具が手元に届き、突然赤絵にはまりました。祖母が、金沢の出身で実家を訪ねたり、手元に九谷焼きがあった事もありますが、すっかり魅力に取りつかれています。和陶器に和絵の具で描くのは、勿論洋食器に和絵の具で描くことも素敵です。絵の具がはがれない様に描きます。

また、赤絵は色も素敵ですが、特に古典的な和柄が素敵です。麻の葉、青海波、七宝、市松等ですが、最近の気に入りは、青海波と七宝で度々描いています。長く伝わって飽きない美しいデザインです。

フラワーアレンジメントも、ネットで、普段手に入らない様な和バラや外国のバラ、草花等を届けてもらい、オンラインレッスンを受けて生けました。庭の草花やハーブと共に生ける事を楽しんでいます。投げ入れ、テーブルアレンジ、リースアレンジ、ブーケ等どれも周りが素敵になりますが、特にお気に入りは、シンプルに生ける投げ入れと、ブーケが好きです。

良く、コロナ前コロナ後と言われます。オンラインが増えた事は、いずれ来る時代がコロナウイルスで早まったとも言われています。便利になった反面、対面で会えて話せる事の大切さを感じます。

これからは、その両方を使い分け、遠方の場所で起きた出来事もますます身近に感じる時代になると思いました。

とける

心　月

気温が上がってくると　シャーベットがとけるように　花の色が辺りにとけ出す。

ある夏の夕暮れ。まだポツポツとしか家の建っていない広大な造成地の坂道を　犬を連れて歩いていた時のこと。

おかしな現象に心を奪われた。

少し先のオシャレな門柱の横から　薄紫が辺りに広がって　見ていると静かに　一面の空気が花の色にうっすらと染まってゆく。目を凝らしてその正体

を確かめようとするのにどうしたことか　ここまでが花で　ここからが空気と　分けることができない。気がつくと　自分も　その色の中にいた。静かに身体が薄紫にとけてゆく。

時を超えた一種の静けさ。

時間・空間の何と曖昧なこと。

やはり夏のような夜だった。

赤道に近いシンガポール。オーチャード通りにグッドウッドパークというホテルがある。そのゆったりとした敷地には　プールが三つもあった。二十そこそこだった私は　仕事で訪れるたびに　夜に昼にプールにつかり　全身を撫でてゆくやわらかな水を楽しんでいた。

その夜　一年を通して泳げるそのホテルの一番小さな　しかし一番深いプールは　わたし一人だった。ゆらりゆらりと肢体を動かしプールの正に中央で　潜って逆立ちになり　ゆっくりとバランスをとって静止した。その時。途端に時間が止まって場所の感覚が消え　ただ静けさだけだった。息苦しさも無く夢かうつつかもわからない。ここまでが自分で　ここからが水　と分けることもできない。時間の経過の感覚が無いまま　何の恐怖も覚えることなく　いつしか水から上がっていた。

長い時間を経てもなお　ありありと残る　その二つの感覚。

今にして思えば　花の色がとけ出て空気と一つになることも　水に身体がとけて一つになることも同じことだったような気がする。空気も水も花も身体も　つまり　気体も液体も個体も　ある瞬間　ふと　脳を離れて　時を超えた一種の静けさの中で区別が無くなり　人類史以前の　つまり　つくりごとの無い　ただただ「大自然の生命の底のない底無限の静かさというか　或いは無限なしじま」へ連なっていく。その連なりのこちらの先っちょに　花と出で　水と出で　ヒトと出ず。ただそれだけのことかもしれない。色不異空空不異色。境はあって無いようなもの。

日曜の朝　シャガやシランの間を通って山門をくぐり　開け放たれた畳の間で坐禅を組む。人の気配は消え　鳥の声が緑に交じり　畳の色が光に浮き陰に沈む。何もかものみ込んで　時間が静かに止まってゆく。

ひとうつ。ふたあつ。みいっつ。
声なき声が　いつしかしじまへと　とけてゆく。
（「引用」西谷啓二『宗教と非宗教の間』）

わたしのツール・ド・アムステルダム

高橋章夫

とにかく部屋だろうが、トイレだろうが、玄関だろうが、掃除するのが面倒なのだが、実際に綺麗に清潔にしておくことで、【ルドルフさん】が救えるわけはないが、日常使用するトイレを毎日毎日掃除することで、周りの雰囲気も良いほうに換わっていくとか、自分の部屋を要らないものや、あまり使わないもので占領されないようにココロがけることは、心理的にもすっきりして、ルドルフさんに好かれる道に通じる可能性があるという。

お店で気に入った商品を購入したいと思ったら、その値段の分だけ、ルドルフさんを渡す。それ以上でも以下でもないと考えていたのだ。しかしそれ以上のことがあったのだ。目が丸くなったのは、ルドルフさんの請求書を見て開いたら、『こんなに手元にあるルドルフさんが減ってしまった…』とか、『家賃とか、光熱費とか、こんなにするのかよ…』とか思うものだが、確かにジャポンの消費物価は、先進国でも高いらしいし、『もっと安くならないのか…』と大多数の庶民は思うのである。そこはぐっと堪えて、その部屋にいることで、よいことを探すのである。例えば、雨や台風を凌げる、精神的肉体的に疲れたら眠るとか、お気に入りの楽曲を、ちょっと大きな音量できく、トイレやバスルームに篭(こも)って妄想に耽るとか、自炊することで食費を節約するとか、ひたすら自分の食べたいものを食べたいだけ、どれくらい太るとか気にせずに食べる事も出来る。

家族が同居の場合は、そうもいかない事もあるけれど明日への活力を取り戻すことが可能なのは屋根があって、周りと隔絶している環境があればこそである。請求書類に感謝の気持ちを表わすことは、意外と難しいけれど、やって損はないと思う。例えひとり暮らしだとしても、隣の住民が怒鳴り込んでくる姿を想像しなくてもいいのだ。いつもだったら四月に、入園式だとか、入学式だとか、…会社は、中

途採用があるから、春にどうこうというようなことはないけれどしかし、この世界に〈ツール・アムステルダム〉がある以上いまこの瞬間にも、何が世界中で起こっているのか、つい気になってしまうのだが、スマホンが使えないときは、レディオムを聴いているのだ。近年のレディオムはとても高性能で、音質もよくて番組表もすぐに検索できるのである。普段誰とも会話などしないけれど、愛猫のグレゴリウスとはよく会話する。最近太った?と聞いたら「レディになんて失礼な言い方ねえ」と呟いて何処かへ消えた。

ボ・ボ・ボクらは少年たんてー団

竜田孝則

真っ暗の視聴覚室で、ボクらは何やら怪しい幻燈(スライド)を見せられていた。夏休み前の衛生指導だ。しかし、これは純真な小学四年生に見せてよい映像では断じてない。腹を切り開かれた死体から、寄生虫がバケツ一杯分くらいうじゃうじゃと這い出しているのだ。

女の子は泣き、男どもは一斉に吐く真似をした。大混乱の暗闇の中に、節穴から一条の細い光が差し込んできた。光は反対側の白壁に、外で遊ぶ子ども達の楽しそうな姿を鮮やかに映し出していた。まるで色付きの動画だ。「これ、映画とおんなじじゃないか！」

少年たんてー団のボクらには、どうしても解けない謎があった。映画である。幻燈の静止画の仕組みしか知らないボクらには、登場人物が動くということが、どうしても解明できなかったのだ。しかし、その謎もたった今解けた。きっと、映画館のどこかに明智小五郎や小林少年、そしてあのにっくき怪人二十面相がいるに違いない。それをあの光の仕組みでスクリーンに映し出しているのだ。じゃあ、二十面相はどこにいるんだ。光が出ている部屋は小さすぎる。あんなにたくさんの人が入れるところは、そうだ、スクリーン裏しかない。スクリーンの裏に忍

び込んで秘密を暴いてやるんだ。二十面相、覚悟しろよ。

「トーエイ」という近所の映画館で、調査を実行した。アキラの事前調査によると、便所の中に怪しいドアがあったという。きっと、そこがスクリーン裏への出入り口だ。映画そっちのけで、アンモニア臭の漂う便所に侵入すると、たしかにベニヤ板の粗末なドアがあった。「こんなところに、ほんまに明智小五郎がおるんかなあ」とは思ったが、中から本当に明智小五郎の声が聞こえてきた。

「怪人二十面相。ここまでだ。あきらめろ」

ヒロシを先頭に、スクリーン裏になだれ込んだ。

「二十面相、覚悟」。しかし、勢い込んで飛び込んだ所には大きなスピーカーが二台と、ガラクタが乱雑に置かれた埃っぽい空間が広がっているだけだった。スクリーンには怪人二十面相の顔が大写しされていた。

「ワーハッハッハ。明智君。残念だったなあ。さらばだ。また会おう」

気球に乗って去っていく二十面相を、映画の中の少年探偵団とボクら少年たんてー団は呆然と見送り、立ち尽くすだけだった。

自由研究でこの冒険を発表したところ、男子には大うけしたが、女子と先生には大不評だった。が、とある夏の最高の冒険だった。

あれから六十年。アキラとヒロシは先に逝った。たんてー団はボク一人になってしまった。でも、バッジは大切にしている。見るたびに、懐かしさがこみ上げてくる。諸君、また会おう。さらばだ。（亡き友に捧ぐ）

「父・野口米次郎と子・イサム・ノグチ」

富安　千鶴子

令和三年夏、東京都美術館で、「イサム・ノグチ、発見の道」という彫刻展が開催されている。二十世紀を代表する、世界的彫刻家である。詩人の父野口米次郎と、米国女性との間に、イサムは生まれた。

イサムは、世界を旅し、多くの人達と出会い、独自の境地をきりひらいていった。イサムは、父の故郷の日本にきて、日本文化に出会い、発見する。

禅の世界の域、和紙の不思議、折り紙のもつ形、そして、ついには石までも、本質や空間を自分と一体として、着想した。

自然の中に調和させ、その世界観の中に、命を息づかせた。紙をみつめ、石をみつめ、本をみつめ、静寂と沈黙の中、命を吹きこむ、それが到着点であったのだろう。

米国シアトル市の為に制作した、「黒い太陽」の存在は圧巻だった。この作品は、イサム一人の力だけではない。日本の石工達との出会いがなければ、決して、生まれなかったのだ。イサムは、父野口米次郎と母米国人のおかげで、東西文化を、豊かに吸収したゆえんだったろう。そうでなければ、イサムの成功はありえなかったと思う。

時に、日本文化の指し物文化の技術を生かした作品、「化身」の立ち姿に、驚ろいた。

彫刻と空間の一体感は、すばらしい。父野口米次郎の詩の表題に、「太陽の子、生命の光、血汐流れる、ヨネ・ノグチ」と。その中の一遍に芸術家と題する詩がある。その内容は、「沈黙の言葉で暗示す。伝統に忠実であって、その遍人気質を発揮しながら……

沈黙の二字を忘れたであろうか、私共は……神様からもう一度沈黙をもらって来ねばならない……汝を恐れる」と。「沈黙、孤独、常に生死と共にあり、沈黙は孤独を生かす花」と言い、人間として成長し続けたのだろう。

父野口米次郎は、福澤諭吉門下生として慶應義塾に学び、米国新聞社の通信員をし、帰国後は、慶應義塾にて、英文学教授として、四〇年間在職した。その間、オックスフォード大学にて、「日本詩歌の精神」「日本詩歌論」を講義して、日本文化の伝統を、海外に紹介した。日本絵画芸術論の中で、光悦、光琳、乾山、歌麿、北斎、春信、能、などの紹介論は、実に天下一品と私は思うのだ。思想に重きをおいた近代詩の中に於いて、現代、その存在を再評価してほしいと私は願うばかりだ。

「人生は心の幻想と、現実との争闘である」とイプセンは書いているが、まさに、この父野口米次郎

と子イサム・ノグチは、東西をまたにかけて、心の旅路を越え、存在しているのだと、詩と彫刻、その存在に、私はますますひかれていく。この父にして、この子あり、である。香川県高松市牟礼町のイサム・ノグチ庭園美術館へコロナが終息したら、足を運ぼう。牟礼の地で、イサムが感じた事を、私もあやかりたいと願うのである。

松尾芭蕉著『奥の細道』について

中岡裕志

私は七年前、東京都江東区の芭蕉記念館に行きました。隅田川沿いの三階建で、芭蕉書簡などの資料を展示している。一階入口前は日本庭園で、小さな池に滝があり、芭蕉の句碑も立てられている。

近くには、隅田川と小名木川に隣接した分館があり、四季折々の水辺の風景が楽しめる。屋上の史跡庭園には、芭蕉翁像や芭蕉庵のレリーフを配し、往時を偲ぶことができる。そこで、松尾芭蕉著『奥の細道』について調べてみました。

松尾芭蕉は、寛永二十一年（一六四四）伊賀国上野赤坂（三重県伊賀市）に生まれる。十九歳前後から、藤堂新七郎家の嫡男・良忠（蝉吟）に仕える。二十九歳、江戸におもむく。三十五歳の頃俳諧宗匠となる。三十七歳、深川の草庵（現・芭蕉記念館分館）に移り住む。四十三歳、「古池や蛙飛び込む水の音」の句を詠む。

元禄二年（一六八九）弥生も末の七日（三月二十七日）芭蕉（四十六歳）は、門人の曾良（四十一歳）を伴い、深川にある門人杉風の別荘（現・採茶庵跡）から隅田川を上り、千住大橋で同行してきた見送りの人達と別れる。東北の日光、松島、平泉、立石寺、出羽三山、象潟、北陸の出雲崎、親不知、那谷寺などを経て、大垣までの「奥の細道」の旅に出る。矢立の初めの句を「行春や鳥啼魚の目は泪」としている。

象潟は、昔は大小百数十の島が浮かぶ入り江で、松島と並び称されるみちのくの景勝地でした。文化

元年（一八〇四）の大地震によって海底が隆起し名勝は失われたが、水田に点在する島々は、今も当時の面影を伝えている「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠んでいる。元禄二年八月、約五か月の旅を、大垣（岐阜県大垣市）で終えました。

結びの句を「蛤をふたみにわかれ行秋ぞ」としている。

奥の細道むすびの地大垣の水門川沿いは、この旅で芭蕉が詠んだ五十句の内、二十二の句碑が立てられた「ミニ奥の細道」として、芭蕉の足跡をたどることができます。

松尾芭蕉は、元禄七年（一六九四）五十一歳で亡くなります。辞世の句は「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」遺言により遺体は、大津の義仲寺（滋賀県大津市膳所）に埋葬されました。

平成二十一年編松尾芭蕉この一句・現役俳人の投票による上位三作品は次の通りです。

三位「夏草や兵どもが夢の跡」平泉・高舘

二位「閑さや岩にしみ入蝉の声」立石寺

一位「荒海や佐渡によこたふ天河」出雲崎

コロナ禍が明けたら、松尾芭蕉を偲んで、むすびの地大垣で「ミニ奥の細道」を廻ってみたいものである。

資格に挑戦

ねこすけ

以前、テレビである方が「いくつ身に付けていても邪魔にならない物は資格です。」とおっしゃっていた事がありました。

コロナ禍で自粛生活が続く今、資格取得に取り組むのには良い機会です。

介護職に就いていた頃、通信講座を受講しいくつかの資格を取得した経験があります。数冊のテキストが終わる毎に添削課題を提出し、過去問を繰り返し解くという勉強法は、私には合っていたような気がします。

しかし、あれから二十年近く経ち、物忘れや簡単な漢字が書けないなど、私の脳はすっかり錆びついてしまっています。

そこで今回は久々の学習という事で、少し緩めの

野菜の知識が学べる講座を選んでみました。野菜の栄養効果、調理や保存方法など生活に結び付いた興味深い内容で、在宅受験ができるという手軽さです。

学習方法は以前と変わらず、添削課題の提出がありますが、新たにオンライン学習が加わりました。質問はメールでやり取りができて、ウェブテストなどもあります。ウェブテストを初めて体験しましたが、クイズ感覚で問題の回答ができる楽しさを味わう事ができました。

そして添削課題の提出も全て終了し、いよいよ在宅受験です。今回の講座には過去問がなくテキストの読み返しや、ウェブテストのおさらいをする位しか対策法はありませんでした。もちろん、在宅受験なので、テキストを見ながら回答しても構わないのですが、そこは自分に厳しく、自力で挑戦してみる事にしました。

しかし、野菜の栄養学や法規分野は答えに迷う事が多く、何度もテキストを見てしまいたいという気持ちにもなりました。それでも何とか合格し、認定証も頂きました。

今回、試験に合格できたからといってそれで終わったわけではありません。学んだ知識を日常生活で活かして行く事の方が、大切だと思います。手元にはテキストの他に野菜・果物の図鑑やレシピ集も残りました。これらは、旬の野菜と組み合わせの良い食材選びや健康効果を高める調理方法を調べる際、活用して行きたいです。

今後、いくつの資格を身に付けられるか分かりませんが、自分の興味の持てる事を探し続け、素敵に年を重ねて行きたいと思っています。

サン・ベージュ【傘・米寿】の会

長谷川　恒　信
（辻堂元町）

今年の初頭に米寿を迎え、加えて結婚50周年の金婚式のダブル祝いに感謝しつつも、コロナ禍中で予定の祝会は全てご破算になってしまった。振り返れば戦前、戦中、戦後と慌ただしく時が流れ、アナログ時代からデジタル時代への変化に追いまくられ、

戸惑いの連続であった。8年前に傘寿を迎えたとき、親しいエルダースキー仲間と遊び半分でSunBeige（傘・米寿）の会を組み上げた。

１９７８年にサンモリッツで最初のシニアー海外スキーツアーを企画し、以後２００５年までカナダ・アメリカ・ヨーロッパ各地の熟知されたスキーゲレンデを巡回してきた。当初はシニアー世代（60歳から80歳代）グループで24時間のフライトに耐え、トニーザイラーに会いたくてオーストリアのサンアントンまで滑りに行くのは狂気の沙汰と冷やかされた。それでも新たなセカンドライフを求めて果敢に挑戦し続け、マッターホルンを仰ぎ見ながら氷河を滑走してイタリアのチェルビニアまでスリルを味わい、猪谷千春のシュプール跡を求めてダンペッツオーまで足を延ばした。カナダのウイスラーやバンフのアイスバーンに足を取られ肝を冷やしたり、フィンランドのレビでは黄金の竜が舞い上がるオーロラに感動し、氷上の犬橇（イヌゾリ）に戯れながらサーメ人との暖かい交流が思い出に残っている。米国のソルトレイクの塩味にびっくりし、ホワイトバード山頂の強風に悲鳴を上げながら支えあって下った恐怖のスキー体験も忘れ難い体験であった。

人生の後半で一期一会を実践した仲間達の半数は既に天国に旅立ったが、未知との遭遇に飽くことのない興味を抱き、生命を賭けてスキーに興じた僅かな日時に悔いはなかったと思う。さらに付け加えれば、一週間のスキー三昧の後で観光文化ツアーを体験するために近隣諸国を訪ねることが恒例のスケジュールであった。モナコのモンテカルロからニース海岸を経て、プロバンス地方のグルメツアーで仏料理の神髄を探り、ゴッホの足跡を探ってアビニョンの橋の上で輪になって踊ったレビから寝台列車でサンクトペテルブルクまで足を延ばし、エカテリーナ美術館やマリンスキー劇場で本場のバレエ白鳥の湖が鑑賞できたのは偶然の幸運であった。

老後を心豊かに過ごす秘訣は気力、体力、知力と僅かな財力のバランスを維持することであるが、加齢とともにこの条件を保つことが難しくなり、自律の覚悟が重要となる。また異国での未知の文化に触れる喜びを実感するためには仲間同士の忍耐や寛容のチームワークが求められる。現実には厳しい猛吹雪に遭遇したり、高度馴化に苦しんだり、広大なゲ

レンデで方向を見失なったり、異国での言語の壁や不安のリスクに耐えた者のみに与えられる賞与である。いまこそ米寿を過ぎて生きていることから、生きていくことへの命題が問われている。

不思儀な言葉

畑　昌子

客の一人が毎週、会社の入口に飾ってある花を写メールで送って来る。

「山祇に会釈して剪る百合の花――昌子」

――いつもありがとう「今日も一日がんばりましょう――。」返信メールを出した後、どこかで聞いた文句だナ……。それは広告の紙の裏に書きつづっていた亡き母の古い日記。

毎日毎日、今日も一日がんばりましょうと書かれていた。

「昌子ちゃんは世界一」指をポンと立て、一〇一才の叔母は叫んだ。身寄りのない人である施設に入所した。介護施設は数々あれど「面会ありがとうございます」と言われた時はビックリした。生前のら猫達にエサをやっていたので猫が好きなのかと思っていたら「私ねネコはあまり好きではないの、犬の方が好き」と笑ひながら話したという。私よりも施設の方に心を許し見せていたのであろう。

人という出逢いはどこでどう仕組まれているのかしら?本当の家族の様に接して下さった方々葬儀の事々も儘ならない時、手を差しのべて下さった葬儀社の社長さん。どの方も似ているのです。心をあたたかく持った人は同じ人を呼ぶのでしょうか?

長い一日信仰心の無い私も出口に立ちゐるマリア像の手にすがり、もう叔母を連れていってと願い世界一じゃないヨ～～～！まだまだやる事があったのにと精一杯ほめてくれた叔母にありがとうと言うのは私でした。

「死ぬるにも力がいるよ曼珠沙華　昌子」

近しき者が悪い病に取りつかれた。

神よ仏よ願わくば我が身がわりにと思い悩み好きなものを断てばと祈りに添えた。

俳句を造りはじめて三十年勉強嫌いな私が辞書を

引き季語を調べいつの間にやら、市の俳句大会、一遍忌に出句する様になり、何よりの楽しみとなった。全国に俳句結社はたくさんある中二つの結社に入門した。

俳句とは不思議なもので、心を打つ詩情がその人その人違う。自分がうまく出来たな、と思っても読み手に伝わらなければそれで終る。わかるよと選に入った時の歓びは大きい。

”そんな俳句を断つ“

どうぞ病が癒えますように

藁ぼっち遠まなざしに富士の嶺　昌子

チェプとノンノ
第7話「川」

ハム　ス　ター

（湘南絵本づくりの会）

チェプとノンノは独り暮らしのベッツおじさんが作ったペットボトル人形の男の子と女の子です。ある日、ノンノが橋の上を歩いていた時、川で何かしているチェプを見つけました。

「おーい、チェプ。何してんの？」

「流れてくるものを拾ってるんだ。」

「危ないよー。拾っても交番に届けるんだよー！」

「平気、平気。オッケイ、オッケイ。」

そのとき、橋の上に子どもたちが通りかかりました。みんなそれぞれ、きれいなバッグを持っています。

「あ、みんな、こんにちは。」

「あ、ノンノちゃん、これ、自分で手作りしたの。羊さんの毛でね。」

「すっごくかわいいね。羊さんの毛がふわふわしてるね。お花もきれい。みんな芸術家だね！」

「あ、風だ！」

バッグが飛ばされ、川に落ちて沈んでしまいました。

「おーい、チェプ。そのバッグをとってよ！」

「オッケイ！」

「もう少しだ。あれれ？体が軽すぎて潜れないや。」

手が届きそうで届きません。

「今わたしが行くよ。ペットボトル人形なんだから、こうして小石を詰めなきゃだめよ。」

ノンノは橋の上から川へ飛び込みました。

「あ、ノンノちゃん、すごい！」

ノンノは川底でバッグを見つけました。
「あったあった。わっ、体が重すぎて浮かばない。石を詰めすぎちゃった。ああ、もうだめ。」
そのとき、チェプが大きな石を抱えて潜ってきました。
「おーい、ノンノ。大丈夫？しっかり僕の肩につかまって。いま、石を離すからさ。5、4、3、2、1、0」
ザザ――――――ン
「うわっ。」
大きな水柱ができ、チェプにしがみついたノンノは落ちそうになりましたが、何とか助かりました。
ノンノは女の子にバッグを渡しました。
「バッグを見つけてきたよ。まだ濡れてるから、お家で乾かしてね。」
「ありがとう。」

ノンノはチェプに言いました。
「さっき水の中で考えたんだけどね、もしチェプが助けに来てくれなかったらどうしようかって。」
「ぼくだって必死だったけど、ノンノが死んじゃったらどうしようかって考えてたよ。」

オレオレ詐欺の経験

藤　本　眞砂子

息子と朝食をとっていた時電話で「おばさん、オレだけど」の声。「ドトール今井店でコーヒーを飲んでいた時にさー、椅子の下に置いてたバッグを置引されて、携帯から財布から、おまけに今日の会社でやった会議の重要書類をすべて持っていかれたのさ。上司に二万円借りて、会社の資料だけはなんとか作成し直したんだけど、申し訳なくて…、百万円くらいのお礼をしたいので貸してくれないか」との電話があった。私は夫を亡くし、八十二歳にもなり自動車も無いし、銀行にもそんな額のお金も無いので（本当は息子が運転してくれて銀行でもどこでも行けるのだが……）。「僕会社をクビになっちゃうので、何とかタクシーで銀行に行って幾らでもいいからおろしてきて！後で上司と車で取りに行くから」

と言う。私は主人の甥で四十歳代のKさんと声やしゃべり方が良く似ていたので、最初のうちは信じ込んで話していたが、傍に居た息子が、「それ詐欺の電話だよ」と教えてくれた。地方に住んでいる、その甥の嫁に電話で「Kさん今日上京した?」と確認を取ったら「してないわよ」という返事であった。「警察に電話したほうがいいわよ」と云うので、早速警察に電話をしたところ、十分もせずに、二十代くらいの私服の刑事さんが三人、家にやって来た。その後、二度目の電話がかかり、"詐欺"と解りながら話をした。「私の名前と隣にいる息子の名前を言ってみて」と尋ねると「解ってるのでそんなこと、どうでもいいじゃん!」と答えてきた。隣に居るお巡りさんが紙になにか書いてくれたのだが、こちらはすっかり興奮していて読めない。向こうもやはりあせっているのだろう。「用意出来た?」「出来ないわよ」のやりとりの後、「オレ、会社をクビになっちゃうよ!」と相手は電話を切った。その後三回目はかかってこなかった。刑事さん達は帰り際に「ニセ百万円も用意して来たし、外には二人の警官が見張っている」と云う。"はじめからそのように話してくれていたら、私も一芝居して楽しんだのに。残念!" ―あの時怖くて震えていた自分がいた―。それにしても、最初の電話から二時間余りの時間を過ごして、少々疲れた。その時解ったことは、藤沢署にも「特殊詐欺プロジェクト」なるものがあり、その任にある刑事さん達が我々市民を護ってくれていることに安心の念を抱いた。「ありがとうございます」(感謝)

私としては、なんだかテレビドラマかなんかの主人公になった気分であった。運良く、息子が傍にいて「詐欺だよ」と言ってくれなければ、騙されていたかも……。その日は藤沢市中心に何軒か、同じ様な電話があったとか。

コロナ禍の　お陰?

堀井　寛

コロナ禍でこの一年半ばかり在宅を余儀なくされた。この間に東京オリンピックと云うビッグイベントがあったが、何といっても大谷翔平の驚異的な大

活躍をテレビ観戦（Ｊスポーツ）できたこと、読書三昧が出来たことで、退屈しなかった。

大谷翔平の想像を絶するパフォーマンスの詳細は省略するが、彼のけれんみのない一挙手一投足を見ているとスカッ！とした気持ちになるのは不思議である。大げさな言い方をすると彼の大活躍をシーズンを通じて見ることが出来ただけでも長生きした甲斐があったと思っている。

彼が数多くの人々から愛されているのは、ひたむきな向上心と心底から野球を愛し、プレーを楽しんでいる姿が野球少年を彷彿とさせるからなのであろう。そして周りの全ての人に謙虚に接する振舞いの由縁であろう。

好漢大谷翔平の更なる飛躍を願っている。

「その街（シティ）の文化度は図書館を見ればわかる。」とフランスの文学者が述べている。

秩父宮体育館側にあった南図書館が、「湘南ゲート（旧小田急百貨店）に移転して、ワンスペースで広々としている、何といっても便宜性が最高の立地であり、藤沢市は流石に文化度が高いと内心鼻高々である。

南図書館・村岡図書室・藤澤図書室（Ｆプレイス）のどの職員も対応がとても丁寧で気持ちがいい。

図書館の棚を次から次へと本のタイトルだけを見ながら歩くのも楽しみである。面白そうな本が見つかるとパラパラと拾い読みしてから借りることにしている。

南図書館の左奥のコーナーにある作品全集の中に、学生時代に読んだ井伏鱒二の「山椒魚」を見つけて改めて読んでみると全く違った印象だったのは人生経緯の遍歴によるのだろう。

流し読みを含めて年間に２００冊近くの本を読んだのは初めてであり読書の楽しさを再発見した。

イチページ、イチページめくりながら読み終えて、歯ごたえのある本に出くわした時にはうれしくなる。

読書は新たなことを識る驚きだけでなく、空想とロマンを掻き立ててくれる素晴らしい時間を与えてくれる。

これからも読書は続けてゆこうと深く決心して

いる。

考えてみると・・翔平くんの活躍を楽しめたのも、読書の楽しさを再認識したのも・・・・コロナのお陰?・・であった・・と

ひとり悦にいっている自分である。

ワクチン接種の予約完了

松　本　実知子

年を取ると時が経つのが早くなると聞いていたのは、本当だ。今日はもう六月である。又もや、今月のエッセイのテーマに悩む時期が来てしまった。最近読んだ本やテレビドラマの話しでは又かと思われそうだし、書きたいほど面白い話などない。

では、最近頭の中にしばしば浮かんでくるものは、と言えば新型コロナウイルスワクチンに決っている。

先週、七十五歳の夫の元に待ちかねていたワクチンのクーポン券が送られてきた。

「ほら、見てくれ。どこに予約したら良いだろう」

と開封した書類をテーブルに並べ、夫は悩み始めた。横から目を通すと、かかりつけ医に問い合わせるようにという記述が目についた。それでなければ、大規模接種会場に申し込むことになるのだろうか。

その場で彼は、近所のかかりつけ医に電話したが、

「もう予約は、一杯です」

との返事だった。残念。

次は市の相談窓口へ電話するとすぐ繋がった。そこでは、近場で予約を受け付けている医療機関を八件ほど教えてくれた。夫はしばらく迷っていたが、電話した先は良く行くスーパーの向いの内科で、

「予約は七月五日で、二回目は二六日ですね」

との言葉で、予約は完了した。思っていたより電話予約が難しくなかったのは意外である。日時は、だいぶ先だが仕方ないだろう。

夫のクーポン配布から遅れること一週間、とうとう私にもクーポンが届いた。指折り数えて待つとはこのことだ。

書類を見ながら、相談窓口へ電話した。

「どこへ予約すれば良いか、教えてください」

と訊ねると、市で配布した接種実施医療機関一覧表を見て申し込んでください、と言われた。予約が取れそうなところを教えてくださいと重ねて頼むと、三件ほど名を上げ、

「ただし、これは昨日の情報です」

と、念を押されてしまった。

早速教えてもらった医院へ電話したが、休診日の所や、おかけ直しくださいと自動音声が流れるばかりで、夕方かけ直した。

二度目で繋がった時は、ほっとした。

接種一回目は六月三〇日、二回目は七月二〇日に決定した。忘れないうちに、カレンダーへ記入しておこう。

大仕事が片付いたと言いたいが、本番はこれからだ。無事ワクチン接種終了を祈るばかりだ。秋には、楽しい話題で書ければ良いのだがどうなっているだろう。

八月とレクイエム

松与常清

八月の一日、午前中、モーツァルトのレクイエム、ヴェルディのレクイエム、フォーレのレクイエムを聴いた。八月は広島原爆忌、長崎原爆忌、終戦記念日とスケジュールのようにとは云っていけないのだろうが鎮魂の日が続く。加えて月遅れのお盆もある。戦後の平和の礎となられた被爆者、空爆罹災者、英霊への鎮魂と祈りの日が続く。八月はレクイエムが似合うと云ってはいけないのだろうか。

コロナ禍も二年目である。戦争の受難と時折コロナによる受難の思いが重なる。死者の数ほど違いはするが世界的規模での受難、人類疫病史に例のないウィルスであり受難である。戦時下を生きてこられた方々はどういう思いであろうか。こんなものではないという思いであろうか。戦禍と疫病禍の質的違いはあるのであろうが・・・。七月三十一日の感染者は東京で四千を越えた。空襲下の修羅場とは違え

ど、一種の地獄ではある。戦争もコロナが拡大したように知らぬ間にあれよあれよと訪れるのであろうか。一九四九年生まれの私としては戦争を体験してはいないのだが、戦争に入るさまはかくあるのだろうかという気がする。それは置いといて、八月とレクイエムに戻る。レクイエムは西洋音楽であり、月遅れの盆には似つかわしい気はしないのだが、御先祖様に対しては魂鎮め、鎮魂という気がしないでもない。

御先祖様の供養といえば、被爆者、戦争未亡人、遺児となられた方々の戦後は如何ばかりであったろうかと思う。原爆忌、全国戦没者慰霊記念式典とあるが、いづれも悲痛である。

八月はやはりレクイエムの月であろう。モーツァルトのレクイエム、ヴェルディのレクイエム、フォーレのレクイエムと聴いたあとでベートーヴェン第五、運命で締めくくったのだが、これでいいのだろうかとも思った。

戦争という現実の悲劇に巻きこまれ亡くなっていかれた方々に哀悼の意を捧げる。

今日より八月一日である。八月前半は鎮魂の日の多い八月に入ったのである。合掌。

（二〇二一年八月一日）

私の故郷

儘田　加寿子

国語の辞書で「故郷」の意味を調べた。故郷は生まれた地で、そこに住んでいないことを言うと書いてあった。

故郷は4才の初めまで住んでいた、中国大連である。しかし何ひとつ記憶にない。

両親、姉、兄、弟、私の6人家族であった。

ソ連軍が大連に侵攻してきた時、父はソ連軍に捕まり、捕虜になってしまった。

家には母と子供が残った。

ソ連軍の兵士が、市中を見廻り、我家にも、きた。母は、とっさに子供達と押入れに隠れたが、見つかり、母は手を合わせて必死に命ごいをした。幸い兵士のボスが女性兵士で、他の兵士に話して、何も取

らずに立ち去ったと、大連の話題になると母から聞かされた。
時は流れて、海外旅行ブームの時、両親に大連に行ってみないかと言った。
両親は多くの人々が尊い命を失っている。旅行気分で行く場所ではない。大連は遠い日の思い出として、残しておくと言った。
テレビで満州の特集をみた息子から
「お母さん、元気のうちに大連へ行ってみないか」と誘われた。　しかし両親と同じ答えで、大連へは行かないと答えた。
小学唱歌の「故郷」と私の故郷は、ずい分違いがあるが、ピアノで弾いて故郷の意味をかみしめている。

東京五輪感動美談

森　眞彦

第三二回オリンピック競技大会東京大会（東京五輪）は八月八日に閉会式が国立競技場において無観客で行われ、十七日間の大会の幕を閉じた。新型コロナウイルスの感染拡大で史上初の一年延期となり、大部分の会場が無観客となるなど異例ずくめの大会だった。アスリートたちは各種競技で躍動し、世界中の人々を歓喜に包み、テレビを見る人々の心を動かした。日本は史上最多の金メダル二七個を獲得し、銀十四個、銅十七個を合わせた総メダル数五八個も史上最多だった。
アスリートの活躍の陰には感動的なドラマもあった。八月四日にあった陸上男子百十メートル障害の準決勝の直前、出場予定のジャマイカのハンスル・パーチメント選手はバスを乗り間違えた。音楽を聴いていて顔を上げたら、バスを間違えていたことに気がついた。到着したのは江東区の臨海部にある会

場だった。彼が出場する陸上競技は新宿区の国立競技場で、そこへ行くには一度選手村に戻らなければならない。選手村に戻れば、時間的にウォーミングアップもできず、出場も適わないかもしれない。慌てて近くにいた大会関係スタッフの女性に相談すると、タクシー代として一万円を渡してくれた。そのお陰で競技に間に合いウォームアップもできた。

パーチメント選手は準決勝を3組2着で突破し、翌五日の決勝では、今季自己ベストの十三秒〇四で走り、大本命であったアメリカの選手をほんのわずかの差で抑えて優勝した。決勝に出るからには、何としてもメダルを獲得して、お世話になった女性に報告に行かねばならないと強く思ったに違いない。決勝の後、パーチメント選手は江東区の会場で出会った女性に会うため、間違えたバスにもう一度乗って女性を探しに向かった。再会できると「あなたが助けてくれたから」と言って、金メダルを見せた。そしてタクシー代を返してジャマイカ代表のシャツを記念にプレゼントした。

タクシー代を渡した大会スタッフの女性は、日本とセルビアにルーツを持つティヤナさん。ティヤナさんは金メダルを見て「まさかの金。そんなすごい人だったの」と驚いた。「パーチメント選手に渡した一万円は自腹。私の一万円は仕事をすればまた手に入るけれど、何の選手であれ、彼の人生にとってはかけがえのない時間かもしれない」と思い、一万円を渡すことにためらいはなかったという。

このことを世界的に有名なジャマイカのアスリート、ウサイン・ボルト選手も知り、賞賛している。ジャマイカ国の観光大臣は、ティヤナさんをジャマイカに公式に招待したいと発表し、「彼女が世界のどこにいようとも、自分たちの仲間に示された親切に報いたい」と語っている。また、母国のメディアでも報道されており、五輪王者は「日本人は最高に優しい」と話したと伝えている。

追懐川島芳子と黒姫山荘

柳澤　いそ江

「家ありて帰るを得ず。涙ありて語るを得ず。法ありて正しきを得ず。冤（えん）ありて誰にか訴えん。」男

装の麗人、東洋のマタハリと言われ、昭和二十三年漢奸罪で北京の監獄で銃殺された川島芳子が獄中に書いた詩である。その頃或る地方新聞に軍服の小さい芳子の写眞と、私は日本人よ、川島芳子死出の晴着を用意の見出しに、愈々処刑が決った。養父は長野県柏原に住む川島浪速。の記事を見た。敗戦で心が空っぽの時代だった。血が騒いだ。私は心の丈を川島浪速に書き送らずにはいられなかった。「芳子さんの事を知りたい。」と時を経ず分厚い封書が届いた達筆な筆字で便箋五枚に「山荘には芳子に係る物が沢山有る御来訪を待つ。」の返事であった。幾度か遣り取りの後、信越線柏原駅（現黒姫駅）から北へ枕木を伝うリック姿十八歳の私がいた。その先に〝玄牝庵〟と書かれた山門があった。玄はくろうと牝はめす。これで黒姫と読む。門下生の松澤勘二さんが出迎えてくれた。奥さん、三人の幼児一家で川島の面倒をみる為離れに住み、奥さんの妹さん、川島の世話に小宮山節子さんが居た。川島浪速は立ち上るも儘ならず、聴覚は無くよくあんな手紙が書けたと思ふ程であった。養父に宛てた手紙で芳子は自らを良輔と謂っていた。奔放な運筆乍ら繊細で思い遣りある文面に人柄が滲みその時々の事件事柄が記されていた。三十通位は有ったであらうか。写眞も色々と拝見する事ができて感慨無量であった。山荘には電気が無くランプ水は湧き水風呂は鉱泉へ、紙がなく便所の落し紙に、巻き書翰が放り込んであった毎日が来客の対応に追われた。

芳子の最后の付き人小方八郎氏が報告の為長崎から来訪話しの中に奇特な人が居て金の延棒何本かを女囚の家族に渡し身代りを頼んだ事。死刑の時絹物は纏っていたが顔は撃ち砕かれ髪の毛が長かった事。それは芳子ではない。浪速は言う。六月十四日老衰の為川島浪速は八十五歳で逝去された。山荘に伺って間もなくであった。葬儀は広い座禅堂も他の室も人で溢れた。主の居なくなった山荘は人が去り、遺された立派な仏像家具書翰類総ての遺品を隣の部落の兼ねて交流のある知人の蔵に預けたという。潔癖な松澤さんは何一つ持ち出さず山荘を引払った後病を得て入院。奥さんが県立高校の英語教師をしていた。

何年か後、預けた蔵が火災になり一切を焼失したと聞く。

今から十年程前、テレビ朝日の女性アナが突然家へ訪ねて来た。局で番組作成の為調べたのかこんな話をした。「蒙古に独り暮らす不思議な女性が居た。誰にも逢わず口もきかず死んだ時立ったまま死んでいた。あれは普通の人ではない。川島芳子だ。」と。妖しい彩雲は尾を引きながら時代と共に消え去った。

（全部真実の事フィクションはありません）

とこや「床屋」

山下一馬

近所に行きつけの床屋がある。いつもAMラジオがなっていて、ご主人がもくもくと髪を刈ってくれる。お店には亀を飼っていて、少し早めに着いて前の人が終わるのを待っていると、その亀が足元に来て「少々お待ち下さい。」と言わんばかりに接客してくれる。革張りの散髪台の椅子に座ると、ご主人に「いつも通りで？」と聞かれ、「はい」と答えると、熱く湿らせたタオルを頭に巻くようにして髪の毛をほぐす。バリカンで後ろ側の生え際を刈り上げると、チョキチョキとリズミカルにハサミで髪を刈り始める。てきぱきと髪を刈ってもらっている間、ラジオの番組に聞き入り気持ちが和らいで行く。ある程度髪の長さが整うと、すきハサミで髪を梳き、手のひらで手際よく刈った髪の毛を払ってくれる。カットが終わるとシャンプーを付け頭皮をマッサージしながら髪の毛を洗い、洗面台で洗い流し、リンスで髪を濯ぐ。髪の水分を手で落とし、乾いたタオルで頭と顔を拭いてくれる。「お疲れ様でした。」の声掛けで、散髪台に座る。カップに髭剃り用の石鹸を入れ、ブラシで泡立てる。石鹸の泡を首と耳の後ろに付け、剃刀で生え際を整える。背もたれを後ろに倒し横たわると、先ほどの泡だった石鹸を頬から口の周り、顎にかけて付け、その上から熱く湿らせたタオルを被せ、髭を柔らかくほぐす。その間に額と眉間に泡を付け、剃刀を滑らせ、眉毛の形を整える。私はラジオの番組が流れる中うとうとと睡魔に落ちる。やがて口の周りに被せていた暖かいタオルを外し、頬、下顎、鼻の下と剃刀でゾリゾリと髭を剃って行く。

耳の表側の産毛を軽く剃り、一連の顔剃りが終る。再び「お疲れ様でした。」の声で現実の世界に引き戻される。散髪台の背もたれをもとに戻したら、ドライヤーで髪の毛を乾かし、整髪料を付けて整える。最後に天花粉を耳から後ろ髪に軽く付け、ハサミと櫛で髪の長さを整え、剃刀で生え際を仕上げ、肩、首筋のマッサージで終了する。まさに至福の一時間の作業で心身ともにリラックス、さっぱりした気分になる。そもそも床屋は江戸時代の髪結いから始まり、明治時代の文明開化と共に西洋の髪型が流行し、現在の散髪屋に至る。床屋の店先に、赤、白、青の「ねじり棒」がくるくる回る看板は万国共通で、欧米、アジア各国でもこの看板は床屋を示している。最近はQBハウス、1,200円カットと短時間、格安でカットのみの散髪が流行し、時間と散髪代を節約するご時世である。昔は落語の「無精床」の様に、「行きつけの床屋が混んでいて、代わりに入った床屋がとんでもなかった。」というくらい待ち時間が長かった。今では電話で予約でき、時間通りに行くと髪の毛を刈り、顔剃り、軽くマッサージをして、心身ともにリフレッシュさせてくれる。とかくストレスがたまるこの世の中、せめて散髪は、昭和の雰囲気が漂う行きつけの床屋で至福の一時間を過ごしたいものだ。夕刻に散髪を終え、家での晩酌は格別の幸せを味わえる。

湘南産〝地酒〟への期待

山成健治
（文芸光風）

最近、藤沢市においても酒米（酒を造るのに適した米）の栽培が進みつつあるという。

というのは、昨年（二〇二〇年）、「さがみ農協」の「藤沢市稲作部会」に属する三人が茅ヶ崎市の『熊沢酒造』の呼びかけに応じて、代表的な酒米の一つと言われる〝五百万石〟の試験栽培に乗り出したと聞いたからである。

〝地酒〟というのは、地元で飲まれている酒であると思われているが、正式には、地元で生産された酒米と水を使って、地元の蔵元が醸した日本酒のことをいう。私は以前、神奈川新聞社の『かなしん出版』

から依頼を受けて、「かながわの地酒」という小冊子を刊行したのだが、当時においても、今ここで述べたような意味における湘南産の地酒は存在しなかった。より正確に言えば、蔵元は存在したのだが、当時は地元で生産された酒米が存在しなかったのである。

ところがこの度、藤沢市内で農業を営む三人の方々が、四百二十キログラムの酒米を収穫。更に来年からは、今年の初体験から学んだ様々の〝教訓〟を活かし、本格的な酒米づくりに挑戦してみたいと意気込んでいるというのだ。

ご存じの方も多いと思うが、食べておいしい米と、酒造りに適した米（酒米）とでは、ほとんどの場合、正反対の性質を有している。

すなわち、食べておいしい米は、小粒で水を吸いにくく、タンパク質の多いものが良しとされる。一方、酒造りに適した米（酒米）の場合は、大粒で水を吸いやすく、タンパク質が少なくて、糖化されやすい（米のデンプン質を糖分に変えやすい）ものが良しとされる。

また『熊沢酒造』が湘南産〝地酒〟誕生の狼煙（のろし）を上げたということにも、大変興味深いものを感じた。同社は〝湘南唯一の蔵元である〟ことを、何かにつけて喧伝すると共に、その伝統を守るべく、努力を重ねていると思うからである。今回、〝五百万石〟の試験栽培を提唱したことも、正にそうした思いの一環であったように思えてならない。

藤沢の農家の方々が収穫した酒米を使って、茅ヶ崎の蔵元が本格的な地酒を醸す――来年にも実現するのではないかと思われる湘南産地酒の誕生に、今から期待を膨らませている昨今である。

ケニアの一緑運動、雨を呼ぶ

横田　佳代子

「一緑運動」とは、今、危機に瀕している地球を守るため、一人が一本、木を植えて、地球を守ろう、緑にしようという運動です。ＮＰＯ法人ＩＣＡ文化事業協会の佐藤静代理事長にケニアの植樹の実施を依頼しました。佐藤理事長は、ケニアのイシンヤ農業省と共働で、「一緑運動」を２０１４年、小学校

で始めました。

イシンヤ地区は、ケニアの首都ナイロビの南にあり、大半は遊牧民のマサイ族が多く、半砂漠地域です。ケニア政府が干ばつ警告を発布しました。雨が降らないため一軒で約３００頭、一村で５，０００頭の牛を失いました。「一緑運動」として２００本の苗木を小学校に贈りました。生徒達はその木を植え、保護者となり、自分で木に名前を付け、大切に、大切に育てました。木を育てる事を学んだ生徒達は今度は豆やカボチャ等の野菜を作り始めました。収穫した野菜は給食に使われ、楽しく、おいしく頂きました。生徒たちの熱意と輝きに、教師が協力し、父兄も協力し、行政も協力しました。植樹を中心にコミュニティの輪が広がりました。２０１８年には、５つの小学校で「一緑運動」が実施されました。村でも、オーク、アボガド、モリンガ、ニーム等６，０００本が植樹され、手伝う子供達の笑顔が輝いていました。民族衣装をまとった女性達、鍬を振るう若者達、白髪の校長先生、みんな楽しそうに喜びにあふれ、植樹に協力しました。

「一緑運動」は地域にどんどん広がってゆき、参加者も３，０００名となりました。これにより、食料確保や地域住民の環境への意識が改善しました。

地球上の、誰一人取り残さない「持続可能な開発目標（SDGs）世界を変えるための17の目標」が、２０１５年に国連で採択されました。目標NO.15―陸の豊かさも守ろう―の中で「砂漠化と土地劣化に対処する」ことを目標としています。「一緑運動」の実施はSDGsの目標NO.15そのものです。

小学校の生徒を中心に植樹をしていくという企画が認められ、環境再生保全機構を始め、多くの賛同者を得て、２０１９年には、１５，０００本が植樹されました。植樹が終わり喜びに包まれた時、思いもかけないことが起こりました。ぽつぽつと雨が降り出したのです。この十年間、ほとんど雨が降っていない地域に。

「一緑運動」がケニアに雨をもたらしました。ケニアに何度も訪れ、子供たちと植樹を続けている佐藤理事長は、「ほんとに、１５，０００本植え終わった時に、雨が降り出したのよ」と嬉しそうに言われた。それ以後、ケニアのイシンヤ地区は雨の恵みを受けて、木はすくすくと育っています。

「一人が一本の木を植えて地球を守ろう。緑にしよう」という「一緑運動」が広まればれば、地球の砂漠化を防ぎ、地球はもっと緑になり、地球を守ることが出きるでしょう。

一話一句

吉田邦男
（文芸光風）

旅芝居

わたしは東京の下町向島に生まれ育つた。こどもの頃は友達と遊ぶために毎日休まず小学校に通つた。5年生の春に男子の転校生が来た。わたしの座席の後ろが彼の席になつたのを機に仲良しになつた。彼は旅役者の子で自分も舞台に立つてゐると云ふので、放課後帰宅せずに楽屋を訪ねた。するとこれから立稽古をやるから見ると良いと云ふ。舞台下に行くと、彼の父親である座長が口頭でそれぞれの役者に台詞を教へながら、芝居を進行させる。面白いので見入つてしまつた。これが「口立て」と云ふ演出方法と分かつたのはだいぶ後になつてからだ。一度帰宅し、母の許しを得て夕食後に芝居を観に行つた。彼がきれいな振袖を着て、藤の花の枝を手に美しく舞ふのを観た。不思議な気分だった。半年ほどして彼は転校してしまつた。東北方面の巡業について行つたさうだ。

実山椒子どもと云へど旅役者

紙芝居

我が家の前に、夕方になると紙芝居のお兄さんが来た。夜学に通つてゐると云ふ噂のお兄さんは、とてもやさしくて、ほかの紙芝居のおじさんと違つて駄菓子を買はない子にも紙芝居を観せてくれた。

私はもらつた小遣ひはその日に使ひきる子で、ソース煎餅やきな粉飴を買ひ、型抜きまで買つた。マッチ箱をふたつほど小さくした板菓子に、割り箸で穴を空け一円玉や十円玉を通すのだ。黄金バットや赤銅鈴之助が活躍する紙芝居をろくに観ず、ソース煎餅はふやけ、きな粉飴はなきだしたのも気づかずに、穴空けに集中してゐた。思へば情けない子だ。一円玉が通る前に壊れたのは云ふまでもない。

紙芝居とほくから観る子に若葉

四万六千日

結婚して間もない頃のことだ。

妻と、両親を誘つて浅草の鬼灯市（ほほづきいち）に出かけた。鬼灯市とは浅草寺の境内に鉢植ゑの鬼灯を並べて売る市で、浅草観音の四万六千日に当たり、この日にお参りすれば四万六千日お参りしたと同じ功徳があると云ふから、大勢の参拝人でにぎはふ。

子供の頃、母が鬼灯を口に入れて吹き鳴らしながら、裁縫をするのをよく見てゐた。だから母は当然鬼灯の鉢を買ふと思つてゐたが、釣り忍とかるめ焼きをふたつづつ買つた。嫁にやるつもりだらう。会話はとぎれどぎれだがうまくやつてくれさうだ。親父はと云へば煙草ばかりふかしてゐた。

下駄で来た鬼灯市のかるめ焼き

会津の山菜たちは

吉田弘美

湯野上（ゆのかみ）温泉で宿の駐車場奥に、手入れしていない大量のフキを発見した。近くに山菜はあるか歩いてみた。

ジグザグの急坂を下り、阿賀（あが）川に向う。

途中、会津鉄道の踏切手前で、ヤマウド三本発見。いずれも一メートルはあった。手付かずだ。

踏切越えの土手に、ノビルが集団で在り。いずれも背筋をピンと伸ばし、およそ三十センチはある。健康そのもので、薄紫の花が間もなく咲きそうだ。

少し離れた住所に、駐車場にあった同じフキが群れ、一面フキ色に染めていた。

「山の空気吸ったら」同行している二人の息子が言う。

背を伸ばして見える景色の九割は、東西や南北、鋭く尖った色濃い緑また緑の山ばかりであった。空も少しあった。

八十年使った私の肺に、深呼吸してどれほど山の緑が入ったか。二度三度と詰め込む。

間もなく高さ五十メートルほどの鉄の橋に出た。急に景色が縮んだ。

深掘りした渓谷は、川の玉砂利や飛沫を白、深みを青色一筋と表現した。

駐車場へ戻る途中、地元の老農夫にお会いした。田植したばかりなので、水回りを見に来たのだ、という。

畔で横に拡っている鉄色のセリを少し頂戴した。野生の香りだ。

「セリ、ここの田全部差し上げます」、彼の提案に「参りました」と返し、二人で大笑い。

この地で「山菜を探しに」とか「手付かずの山菜」は、どうも馴染まない気がした。

陽を浴び、自由に、伸び伸びと成長しているからだ。

出発してすぐ「アスパラガスまつり」の旗が見えた。JA系の店だという。アカパプリカ、ミニトマトやズッキーニが売場に並ぶ。

新しい食材を試しているとのこと。

ワラビは、国道二八九号沿いの「道の駅」にあるとの情報で、緩い上り坂を走る。

あっ、あれだ、ドライバーの長男が、会津下郷町「道の駅・しもごう」に駐車した。

建物は新しくコンパクト。サブネームがあった。「しもごうEmatto ―エマット」。

あの、エマットって何語ですか、の問いに「この地の『もっと』という方言です。もっと知ってほしい、もっと味わってほしいという私達の気持なんですよ」と売店の方。

会話のきっかけずくりか。「お洒落ですね」と、やっと返した。横に居た広告屋の息子が「ん?」と少し反応した。

秋から春に、雲海が観えますよ、を背にして国道に戻り、国境の「甲子山トンネル」に向う。道程一里の長い隧道を抜けると、そこは郷里「白河」である。駅に接する小峰城の城下町だ。車内で二人は中華そば、年貢町の、でOK。親父は、大工町の山菜そばか。だと。

初夏の訪れ

萬　荒太

家から五分ばかり坂を下ると「滝川」という小さな川がある。幅が五、六メートル程度の小さな川で、さほど傾斜はしていないのに流れが速く、川の音が伝わってくる。

「春の小川はさらさら行くよ」が浮かんでくるが、サラサラではなくザァザァでもない。どうもその中間のような音である。今は岸も底もコンクリートだが、その前は草木が生える自然の川で、水はサラサラ流れていたにちがいない。

川沿いの道を歩くと、家からビワの枝が川の上に伸びていて、ビー玉のような実を付けている。数日前はまだ青かったのに、もういくつかの実は黄色くなっている。こんなに早かったかと、生家のビワを思い浮かべたが、色付く速さは記憶に残っていない。

やがて谷戸にさしかかると、畑にいくつかのビニールハウスが建っている。右に川、左に畑を見ながら歩くと、川面を覆うように白い花が咲いている。空木に違いないと思いながら近づき、スマホを取り出してシャッターを押した。「そうだ、もう夏なのだ」と、誰もいないのをいいことに口ずさんでみた。

卯の花の　匂う垣根に
時鳥　早も来鳴きて
忍音もらす　夏は来ぬ

恥ずかしいが、五、六年前まで「卯の花」が空木のことだとは知らなかった。葉っぱを従えるように、花柄を伸ばしシャープな花をぎっしりと付けている。よく見ると花弁の間には十本ぐらいおしべがあり先端に黄色い花粉が付いている。葉の緑とのコントラストが、影になっている小川の側面でも、白い花を浮き立たせていた。

空木の垣根はあまり見かけないが、清少納言も「卯の花の垣根」と書いており、昔は多かったのかもしれない。こんなに密に咲いていれば匂うだろうと、川面に覗き込んで嗅いでみた。匂わない。ホトトギスではなくウグイスの声が聞こえる。張り上げているような鳴き声はとても忍音とはいえない。好きな歌詞のとおりに、感じるのはなかなか難しい。

畑に植えてあるカボチャもズッキーニもシャープな黄色い花をつけ始めた。丘を見上げるとミズキが綿帽子をかぶっている。ヤマボウシはないかと歩いていると、畑に近い家の庭に咲いていた。生垣にしているサンゴジュも花柄にたくさん蕾を付けている。笹竹で鉄砲をつくり、この実を込めて打ち合って遊んでいたのを思い出す。木の名をテッポウダマと呼んでいた。

次の歩く時にはどうなっているだろうか。ビワの実は全部黄色くなり、卯の花の匂いが嗅げて、テッポウダマの小さい花も開いているだろう。